

北方四島交流事業洋上セミナー (根室市・根室沖) 開催結果報告書

(目次)

I 開催概要	1
II 講話要旨	4
1 テーマ:「北方領土問題と根室地域の啓発」 講師:伊勢 治正(根室振興局北方領土対策課長)	
2 テーマ:「元島民の想いととも」 講師:本田 幹子(元島民2世(志発島))	
3 テーマ:「通訳者からみた四島交流」 講師:吉田 祐子(ロシア語通訳者)	
III アンケート結果	7
IV 資 料	12
1 広報資料(チラシ:開催要領を含む)	

令和6年12月

(公社)北方領土復帰期成同盟
(北方四島交流北海道推進委員会)

I 開催概要

1 目的

北方四島交流事業の理解促進を図る一環として、北海道内在住の大学生等に北方領土問題や北方四島交流に対する関心を持ち続け理解を深めて頂くため、根室管内で北方四島関連施設の視察、及びセミナーを行った。なお、当初「えとぴりか」号に乗船して洋上から北方領土を視察する予定であったが、悪天候のため乗船は叶わず、納沙布岬等から北方領土を視察した。

2 主催 (公社)北方領土復帰期成同盟 (北方四島交流北海道推進委員会)

3 日時 令和6年9月22日(日)・9月23日(月)

4 場所 北海道立北方四島交流センター等

5 テーマ 「共に考えるビザなし交流」

6 参加対象及び参加者数

- ・公募に応募した北海道内在住の大学生等（一般の方も可）22名
- ・関係団体からの推薦者5名（千島連盟、領対本部、中標津町、別海町、女性団体）
- ・講師3名、事務局4名、北対協2名 計36名

7 講話【テーマ及び講師】

北海道職員や元島民2世、ロシア語通訳者に、各々の立場・視点から実体験を踏まえた講話等頂き、参加者との質疑応答・意見交換を行った。

（1日目（9月22日）15：20～16：00）

- ・北方領土問題と根室地域の啓発【根室振興局北方領土対策課長 伊勢 治正】

（2日目（9月23日）10：40～12：15）

- ・元島民の想いととも【元島民2世 本田 幹子】
- ・通訳者からみた四島交流【ロシア語通訳者 吉田 祐子】

8 その他（視察・見学等）

1日目（9月22日）

- ・道の駅「おだいとう」視察 10：05～10：30
国後島（泊山、羅臼岳等）を間近に臨み、「叫びの像」と道の駅2階資料館を見学。
- ・ニホロ展示室・資料館見学 13：50～14：30
2グループに分かれて館内見学。ニホロ職員による展示品の説明・案内。
- ・北方領土クイズ 16：00～16：40
講話後、四島交流時に撮った写真をスライドで映しながら「北方領土クイズ」を実施。

2日目（9月23日）

- ・望郷の岬公園（納沙布岬）視察 8：50～9：50
歯舞群島（水晶島、秋勇留島、貝殻島灯台）を臨みながらモニュメント「四島のかけ橋」「祈りの火」視察。「北方館・望郷の家」館長による説明・案内。「北方領土資料館」見学。

・グループ討論 13:00～14:20

講話後、北方領土問題と住民同士の交流について感じていること等について意見交換を実施。各グループで話し合ったことや感想等を発表。

9 総括・所感

参加者からは「実際に島を見たことに加え、当事者の話を聞いたことは問題を身近に感じるきっかけになった」、「北方領土問題に取り組む姿勢を転換させる貴重な機会となった」、元島民二世の四島への想いや交流の必要性について「経験者でなくては聞けない内容だった。実体験に基づく話は説得力があった」、四島交流に携わった通訳者からみた四島の話や通訳の仕事について「政治的立場も民間の立場もニュートラルに見て来た方だからこその話がたくさんあり、貴重な経験だった」との声が寄せられ、主催者としては、当初の目的どおり若年層を中心とした参加者の方々に北方領土問題や四島交流事業の目的や果たしてきた役割について理解を深めていただけたものと考えている。

(セミナーの様子)

道の駅「おだいとう」視察



ニホロ職員による館内案内



道職員による講話



北方四島クイズ



「四島のかけ橋」



北方館館長の説明



元島民2世による講話



ロシア語通訳者による講話



グループ討論



グループ発表



II 講話要旨（講話の順による）

1 テーマ：「北方領土問題と根室地域の啓発」

講 師：伊勢 治正（根室振興局北方領土対策課長）

【講話要旨】（講話資料を踏まえ事務局で整理）

（戦前の暮らし）

・戦前の北方領土の写真や総水揚量のグラフと共に、北方四島の産業や、戦前の島の生活、また、北方四島と関連があり、今でも根室市内で販売されている菓子や昆布等の商品を紹介。

（ソ連占領下の北方四島）

・1945年ソ連軍が北方四島を占領してから1948年に日本人全員が退去するまでの日本人とロシア人が混住した時代について、写真を紹介しながら説明。

（四島在住ロシア人との交流等の現状）

・ウクライナ侵攻の影響による日露関係の悪化、ロシア政府の四島交流及び自由訪問に関する合意の効力停止発表等、最近のロシアの主な動向を時系列に説明するとともに、北方四島の帰属に関する問題を解決してロシアとの平和条約を早期に締結するとの日本の立場に変わりがないことを説明。

・四島を訪問する3つの枠組み「北方墓参」「自由訪問」「北方四島交流事業（ビザなし交流）」とその経緯、それぞれの事業実施の様子について写真を交えながら紹介。

（根室振興局の啓発活動）

・北方領土返還要求運動の後継者育成のため、根室管内の高校生に焦点を当てた啓発活動に取り組む「北方領土プロジェクト“N”」を紹介。地元の高校生が考えた「北方領土クイズ」を実際に行ったほか、「北方領土の元島民の想いマップ」や「北方領土隣接地域到達証明書」を紹介。

（参加者へのメッセージ）

・北方領土問題の平和的解決には国民の熱意が大切で、ロシア政府も注視している。特に若い世代に関心をもってもらうことが重要で、世論の高まりにもつながる。皆さんには署名活動などできる範囲で参加をお願いしたい。

（質疑応答）

Q：写真集の他にロシア側から日本人との混住時代について発信したものはあるのか。（学生）

A：ソ連人と日本人の混住時代についてロシア人が記憶していた出来事を書いたものが翻訳され、今年7月「舟」という本が出版された。それ以外には専門書等で紹介される程度かと思う。

Q：北方領土問題の最大の課題と思われることは。（公務員）

A：後継者育成は課題。この問題を忘れず、想いを伝えることが大事。ロシア側も日本の世論に関心を払っているため、国民の機運の盛り上がりが一番の武器になると思う。

Q：北方領土問題に対する現政権の対応をどのように評価されるか。（公務員）

A：パワーバランスやその時代の趨勢があり、安倍首相の頃は27回の会談を行うことができたが、今は諸外国と連携して制裁措置を課さなければならず、一概に評価は難しい。誰が総理になってもチャンス逃さないことが大切。

2 テーマ：「元島民の想いととともに」

講 師：本田 幹子（元島民2世（志発島））

【講話要旨】（講話資料を踏まえ事務局で整理）

（母から聞いたふるさとの思い出）

- ・北方領土の昔と今：戦前と戦後の写真を比較しながら北方四島の各島を紹介。
- ・当時の島の様子、子ども時代の思い出、島の産業、島の人達の生活について聞いたこと。
- ・2014年8月自由訪問で母と一緒に志発島訪問が叶った。地震や津波で島の形は大分変わっていたが、母が住んでいた場所を覚えていて教えてもらうことができた。

（北方四島交流事業について）

- ・母は自分が島を追われて悲しい思いをしたので、今住んでいるロシア人を追い出して同じ思いをさせることはできない、交流が必要であると話し、ホームステイやホームビジットを積極的に引き受けていた。中心となって交流を担ってきたのは、ずっと母だった。
- ・自分の子供達が大きくなって手が離れてから参加した四島交流訪問（択捉島、色丹島）、北方墓参（水晶島、色丹島、択捉島）、自由訪問（志発島）、2021年10月の航空機による上空慰霊、2022年からの洋上慰霊を紹介。

（ビザなしサポーターズ「たんぽぽ」の活動）

- ・2000年から活動を開始し、2006年正式に設立。交流船の出迎えや見送り、ビジット受入、パーティーの開催、SNSでの交流を行ってきた。
- ・活動例を写真と共に紹介：2007年に初めて企画された日本語習得長期研修受入の交流。根室市の金刀比羅神社で実施した交流会。ニホロでの青少年訪問団への食事提供。ファミリー受入でビジットを引き受けたこと。港での訪問団の出迎えと見送り。2021年11月の色丹島の友人達とのオンラインミーティング等。

（参加者へのお願い）

- ・根室に初めて来た人、関係者が身近にいない人もいると思うが、元島民の気持ちを知って欲しい。日本全体の問題としてとらえ、しっかりとした考えをもってほしい。そして、札幌や本州に戻ってからも、今回見たことや聞いたことを伝えてほしい。

（質疑応答）

Q：道東の出身で高校までは学校の環境の中で返還運動に関わる機会があったが、大学生・社会人になってからの参加の機会が少ないように感じる。（学生）

A：大人になって、働き盛りの時に運動に参加することは難しい。積極的に関わることは無理でも、出来るだけ知ってもらい、広めてもらう活動をしてもらえたらと思う。

Q：本田氏の返還要求運動のモチベーションを知りたい。（公務員）

A：母がよく「北方領土は宝の島」と話していたことや、報道カメラマンとして外務大臣の根室入り等を撮影し、元島民の得能さんらと多く会うようになったことがきっかけ。2世として生まれた責任を胸に、これからも伝え続けたい。

Q：島に住むロシア人も世代が変わり、これからどんな交流を望むか（学生）

A：自分が連絡することで迷惑がかかるかもしれないので、今は直接やり取りをしないようにしている。だが、親しかった人達がお墓の掃除をしてくれていたりと、日本語教室を開いて日本語・日本文化を伝えているロシア人もいる。その中で日本人は悪い人達ではないと伝えてくれていると思う。それ以上のことは今は期待できない。

3 テーマ：「通訳者からみた四島交流」

講師：吉田 祐子（ロシア語通訳者）

【講話要旨】（講話資料を踏まえ事務局で整理）

（四島交流における通訳者の役割）

・ホームビジットや文化交流等の場でコミュニケーションを手伝い、船の出入域手続等の各種手続、無線通訳等も行う。人と人の間に立つ仕事。

・地名を双方の言い方で覚え、国益を損なわないように気をつけなければいけない。また、通訳が自分の意見を含めないことは大原則。

（「問題」を「じぶんごと」としてとらえること）

・この問題を知ってはいたが、遠い世界のことのようになり、当事者意識が薄かった。この仕事や抑留関係等戦後処理の事業に携わるようになって、主体的に考えるようになった。記録を残す作業は大切。

・知らないうちに自分の家が誰かのものになる、「どさくさ」の恐ろしさ。身近なことに置き換えて考え、危機意識を持つべき。誰かが自分の運命を決め、誰かに自分の人生が変えられてしまう理不尽さ。日本上陸をソ連に許した英米。北海道や元島民等一部の問題にとどまらず、生存権に関わる問題。

・今年8月広島を訪れたウクライナ人の言葉：「日本では過去のものがウクライナでは現実。」「戦争は早く終わらせてほしいけれど、終わった後も大変なのだ。」

・元島民が先祖の墓参りに政府の取り決めの中で限られた手段でしか行けないのは、冷静に考えるとおかしい。スピードの速さが利点の筈であった2017年9月の航空機墓参。日帰りの予定が、択捉組が国後の空港に着陸できずにハブ空港のユジノサハリンスクへ連れて行かれ、一泊する事態に。

・四島に関係する映画として「ジョバンニの島」「地の涯に生きるもの」「クナシリ」を紹介。体験談や誰かが残してくれた記録から学ぶことの大切さ。

（参加者へのメッセージ）

・領土問題を抱えている民族同士がここまで交流することは珍しい。ノーベル平和賞をもらう位に評価されても良いのではないかと思う。

・激動のロシア。明日何が起こるかわからないのがロシア。こんな時代だからこそ一生懸命ロシア語を勉強して、新しい時代に貢献して欲しい。

（質疑応答）

Q：ポピュラーな言語ではないロシア語を選んだきっかけは？（学生）

A：自分のきっかけはスポーツ。スポーツ界でロシアは人気がある。一方、ロシアは日本好き。少数派だが、いつの時代もロシア文化に惹かれてロシア語を専攻する人は一定数いると思う。

Q：日本語にないロシア語を訳す時の工夫は？（学生）

A：できるだけ近い言葉を探そうとするプロセスは大事。対訳の定番と思われていたものでも実は全く違うことがある。日頃から語彙を自分の中に蓄えておく。以前は直訳を嫌っていたが、逆に「日本人はこういう考え方をするのか」とわかってもらうことがあると気が付いた。

Q：プーチンの後、ロシアは変わると思うか？（学生）

A：将来誰がトップになるかわからないが、相手が誰になっても「日本と組むのが有利」と思われるように日本が下地を作っておくべきだと思う。神頼みはすべきではない。

Ⅲ アンケート結果

1 アンケート概要

(1) 目的

今後の取組の参考とするため、領土問題や四島交流について参加前に知っていたか、また各講師の講話の感想などについてアンケート調査を実施した。

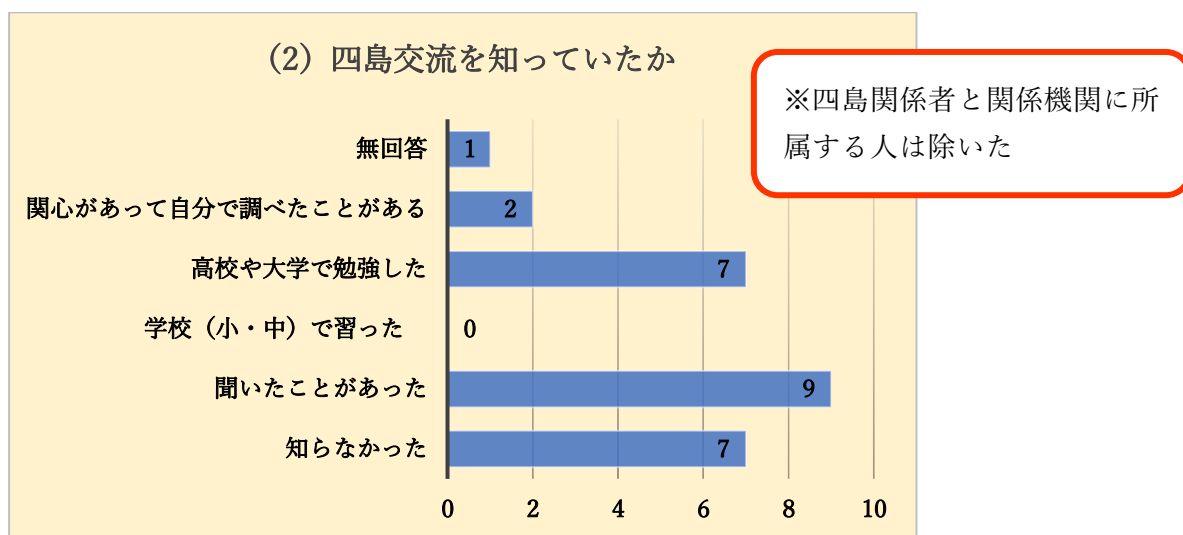
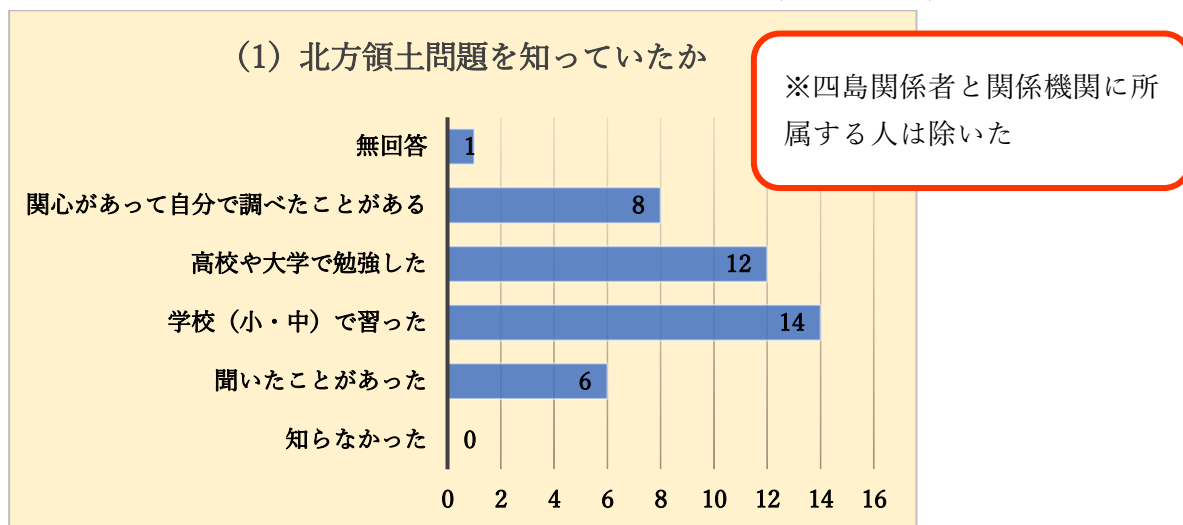
(2) 調査方法

会場で調査票を配布・回収した。(設問は選択方式(一部複数回答可)及び記述式)

(3) 回答率

参加者 27 名中、27 名が回答 (回収率：100%)

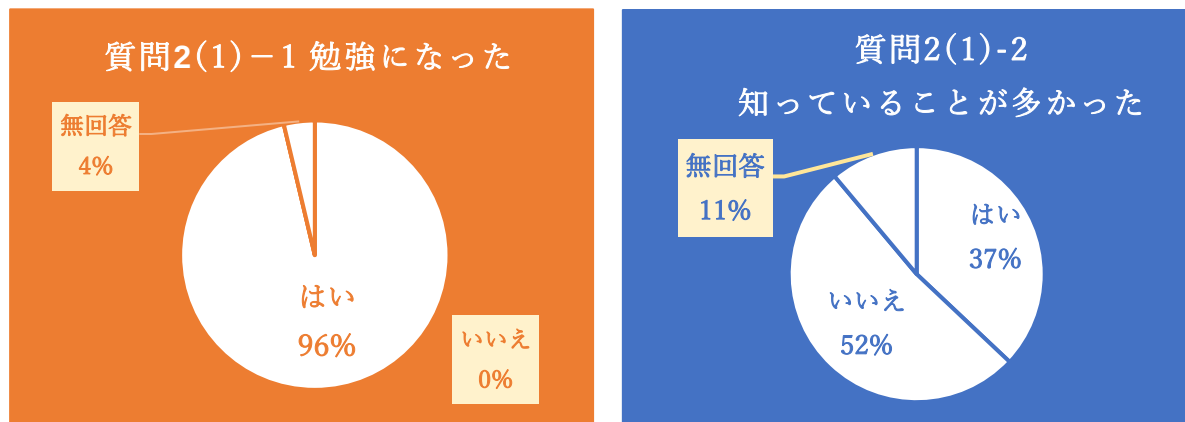
質問 1 下記について、参加申込前に知っていましたか？(複数回答可)



「北方領土問題」については多くの参加者が小・中、あるいは高校や大学で勉強し、「知らなかった」という回答は皆無だった。その一方「四島交流」については、小・中で習ったという回答はなく、「知らなかった」と回答した人も7人いた。

質問2 講話の内容について

(1) 初日の講話（根室振興局北方領土対策課長 伊勢治正氏）について



ほとんどの参加者が「勉強になった」と回答、「知っていることが多かったか」という設問には半数以上が「いいえ」と回答した。

○根室振興局北方領土対策課長 伊勢治正氏の講話に対する感想（主なもの）

（講話内容全般について）

- ・基本から説明してもらえて、ありがたかった。
- ・漁業が盛んなことは知っていたが、具体的なことは初めて知った。
- ・食べ物の話など身近で楽しい話題からで入りやすかった。
- ・行政の立場から見た北方領土問題を知ることができた。

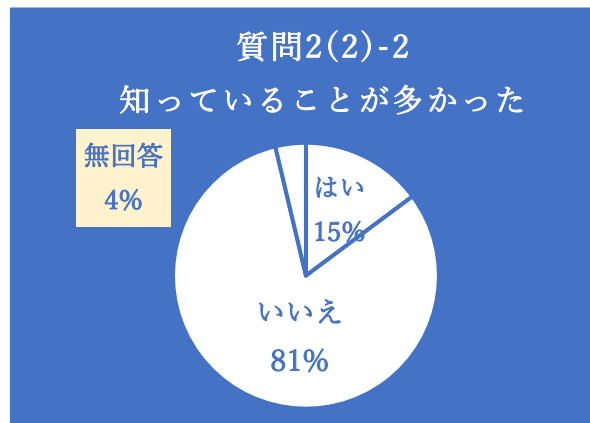
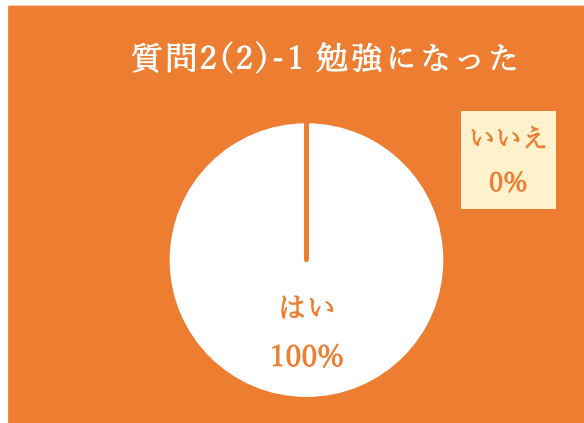
（印象に残ったことや感想等）

- ・「戦前の暮らしを知ることで四島の価値がわかる」という言葉が印象的だった。
- ・行政も民間の考えに寄り添いながら政治的な諸問題の調整に尽力していることがわかり、心を動かされた。
- ・北方領土問題についての日本国民の関心度合いをロシア側も注視しているという話が印象的だった。
- ・問題について対話を続けていくこと、理解を広げていくことが最も重要という考えは、自分の中で新しい視点だった。
- ・ロシア人が日本人の墓を整備していることを知って、ロシア人の人柄を感じた。
- ・（四島側に）返還後のメリットを伝えることが大切だと思った。

（今後の講話に関する要望）

- ・あまり知られていない、実体験にもとづく話をもっと聞きたい。
- ・日本政府の見解と並行してロシア政府の見解も聞けたら、より中立的な立場で考えを深められると思った。

(2) 2日目の講話（元島民2世・本田幹子氏）について



参加者全員が「勉強になった」と回答、「知っていることが多かったか」という設問には8割以上が「いいえ」と回答した。

○元島民2世 本田幹子氏の講話の感想（主なもの）

（講話内容全般について）

- ・島民の生活や気持ち、ロシア人との交流を知ることができて勉強になった。
- ・お母さんの島の思い出話、命がけの脱出、樺太に強制移送された人々の惨状を聞いて、風化させてはならない歴史があることを実感できた。
- ・知識として知っていたが、当事者から詳細を聞いたことは貴重な体験だった。
- ・机上でなく実体験に基づく話は説得力があった。
- ・行ける場所が制限されていること、交流中断時期があったことを知らなかった。

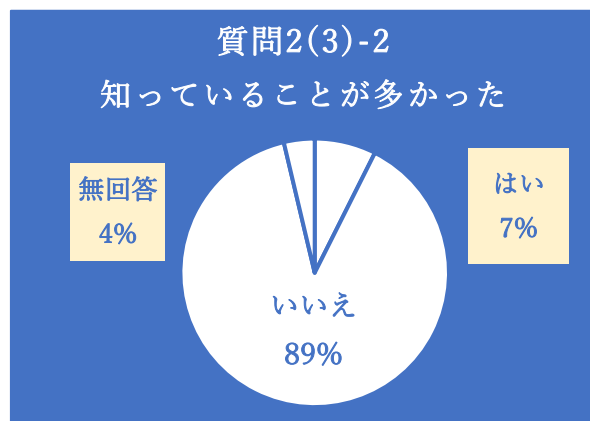
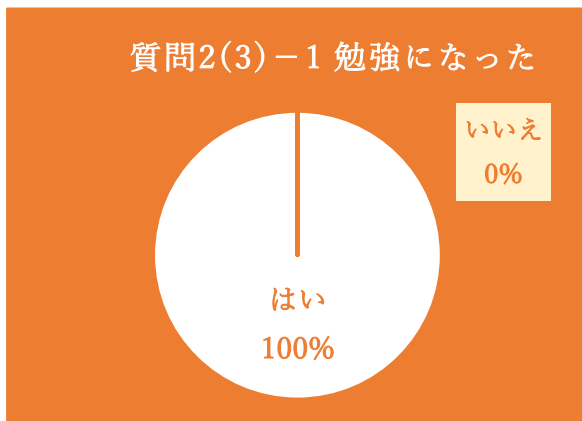
（ロシア人住民との交流について）

- ・実際の交流の様子を写真で沢山見たことでより具体的なイメージを持てた。
- ・民間交流で日露両住民の相互理解が進められた話が興味深かった。
- ・四島ロシア人住民と日本人が互いに良い印象を持って関係を更に深めることが、領土問題の解決に重要だと感じた。
- ・交流におけるロシア人側の声を知った。次世代の交流を続ける必要があると感じた。

（啓発・次世代への継承について）

- ・本田さんの島に対する熱い思いを聞いて、私も四島問題を「自分事」として考えなければと思った。
- ・実際に島を見たことに加え、当事者の話を聞いたことで、問題を身近に感じるきっかけになった。
- ・微力ながらも灯火を消さないよう、私も啓発活動を続けたいと思った。
- ・時間的制約もある中、次世代への継承とその環境づくりが大切だと思った。
- ・元島民2世という責任感から、簡単ではない活動を行っている熱意が感じられた。
- ・北方領土問題に出来るだけ多くの人に関心を持ち続けることが重要だと思った。

(3) 2日目の講話（ロシア語通訳者 吉田祐子氏）について



参加者全員が「勉強になった」と回答、「知っていることが多かったか」という設問には9割近くが「いいえ」と回答した。

○ロシア語通訳者 吉田祐子氏の講話の感想（主なもの）

（講話内容全般について）

- ・通訳の立場からの話はあまり聞くことがなく、新しい視点だった。
- ・政治的立場も民間の立場も両方ニュートラルに見てきた方だからこそその話が沢山あり、貴重な体験だった。
- ・通訳者の視点から経済や国際情勢を知ることは面白いと思った。
- ・通訳という中間の立場からの意見・考えは貴重だと思った。
- ・関係団体や当事者ではない第三者の意見を聞き、とても新鮮だった。

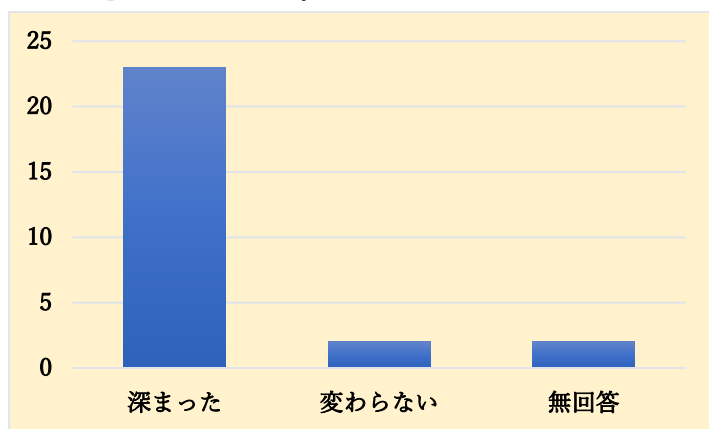
（通訳の仕事について）

- ・通訳の技で衝突を避けながら交流に貢献されていて格好良いと思った。
- ・私情を挟まず、あらゆる知見が求められる難しい仕事に長年携わられていて尊敬した。
- ・四島交流ではあえて訳さない場面もあると知り、政治性も求められることを感じた。
- ・通訳する際にはセンシティブな表現をうまく伝達し、交流を円滑に進めていることを知った。

（印象に残ったこと等）

- ・「日本では過去のことウクライナでは現実」という話が印象的だった。
- ・「自分の運命が知らないところで決められることの怖さ」という話が印象に残った。
- ・地名などの固有名詞についてかなり気を遣うという話が印象的だった。
- ・「ロシア文化が好きなことと、仕事で行わなければならないことを自分の中でどう整理しているか」という話が興味深かった。
- ・ロシアはいつ領土を奪ってもおかしくない、それでも対話と交流が相互理解につながると感じた。
- ・ロシア語を学ぶ人が増えれば、領土問題にも意識が向くのではないかと思った。

質問 3 講話とグループ討議によって、北方領土問題や四島交流事業についての理解が更に深まったと感じていますか。



9割以上の参加者から「深まった」という回答が得られた。

四島が近くに見れる
かもしれないっぴ♪



参加者
募集!



※写真はイメージです

令和6年度洋上セミナー (根室市・根室沖)

とき

令和6年9月22日(日)・23日(月・祝)

ところ

根室市内・根室沖(船舶「えとぴりか」使用)

募集人数

30名(道内在住の大学生等)・先着順

費用

交通費、宿泊費は主催者が負担します(当法人規程による)

詳細

裏面をご覧ください

申込・
連絡

電話 (011)221-3340

メール 008@vizanashi.net

主催

(公社)北方領土復帰期成同盟

(北方四島交流北海道推進委員会)



令和6年度洋上セミナー（根室市・根室沖）開催要領



① 目的

北方四島交流事業は、平成4年度の開始以来、領土問題解決のための環境づくりの一環として実施され、日本人と四島在住ロシア人との間の相互理解の増進に寄与してきたところですが、令和2年度以降、事業が実施できない状況となっています。

このセミナーは、返還運動の原点である根室市等で、施設見学や元島民等の講話、グループ討論等を行うことで、関係者や学生の方々に北方四島交流に対する関心を持ち続け、理解を深めて頂こうとするものです。

② テーマ

「共に考えるビザなし交流」

③ 日時・場所

令和6年9月22日（日）12：30～17：00 ニホロ 前日研修

令和6年9月23日（月）9：00～13：00 根室沖 洋上セミナー

④ 参加者

道内在住の大学生・交流関係者等

Очень познавательно.
勉強になったッビ♪



⑤ プログラム



	時 間		内 容	場 所	備 考
9月22日(日)	12:00-12:20	90分	根室駅→二ホロ	二ホロ	根室駅⇄二ホロの送迎バスあり
	12:30-14:30	60分	昼食→二ホロ見学		
	14:40-15:10	30分	日程説明、注意事項など		
	15:20-15:50	30分	講話「北方領土問題について(仮)」		
	16:00-17:00	60分	北方領土クイズ、懇談		
	17:10-		二ホロ→市内ホテル、根室市内泊	根室市内	
9月23日(月)	8:10-8:30	20分	市内ホテル→根室港	根室市内	市内ホテル⇄根室港の送迎バスあり
	9:00		出港	根室港	
	9:10-9:50	40分	元島民等による講話 「元島民の想いと共に(仮)」	船内	
	9:50-10:30	40分	通訳者による講話 「通訳者がみた四島交流(仮)」		
	10:30-11:00	30分	グループワークショップ 「共に考えるビザなし交流」		
	11:00-12:00	60分	自由行動、洋上視察		
	12:00-13:00	60分	昼食、まとめ		
	13:30-		帰港、解散。根室港→根室駅		

※ プログラムは天候等の影響により変更する場合があります。

